

シラバスの利用状況と記述に関する一考察

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 准教授 今 崎 浩

1 はじめに

中央教育審議会は「我が国の高等教育の将来像（答申）」（2005）の中で「高等教育の質の保証」を重要課題として挙げている。また、「高等教育の質の保証」を考える上では、評価とファカルティ・ディベロップメント（FD）やスタッフ・ディベロップメント（SD）等の自主的な取組との連携方策等も今後の重要な課題としている。

さらに、同審議会は「学士課程教育の構築に向けて（答申）」（2008）において、大学に期待される取組として次の3点を挙げている。

- 自己点検・評価活動の一環として学習時間等の実態を把握し、単位制度の実質化の観点から、教育方法の点検・見直しを行い、質の向上を図る。
- 学部・学科等の目指す学習成果を踏まえて、各科目の授業計画を適切に定め、学生等に対して明確に示すとともに、必要な授業時間を確保する。
- 各科目の授業時間内及び事前・事後の学習の充実の観点から、各 Semester で履修する科目の数・種類が過多とならないようにする。

こうした国の動向も踏まえ、本学では教育改革プロジェクト「文教スタンダード21」を立ち上げ、教育改革に取り組み、一定の成果を上げてきた。今後さらなる教育の充実を目指し、取組を進めていこうとしているところである。

こうした取組の根幹をなすものは「授業」であり、授業を行う教員の「教育力」であると考えられる。しかしながら、本学の学生の中からは「シラバスを見ていない。」「シラバスを見ても授業の内容がよく分からない。」という声が聞かれることがある。

シラバスは授業設計であり、シラバスが完成すれば授業はおおむねできあがったと言えるほど大きな意味を持つものであると考える。また、シラバスには「教員と学生のコミュニケーションを円滑にする」（土持、2007）役割もある。そのシラバスを学生が見ていない、又はシラバスを見ても授業の内容がよく分からないという状況があるならば、本学の取組の根幹を揺るがしかねない。

本研究は、教育の質を保証するために教員の授業力の向上を図ることを目的としている。本稿では、その第一歩として、シラバスについて次の2つの状況を把握する。

- (1) 学生のシラバスの利用状況
- (2) シラバスの記述

2 学生のシラバスの利用状況

2.1 調査方法

学生のシラバスの利用状況を把握するため、次のとおり調査を行った。

- (1) 調査時期 2012年2月
- (2) 対象 本学初等教育学科1年生及び2年生の学生175名
- (3) 調査方法 以下の質問紙による

シラバスに関するアンケート

この調査は、本学で作成されているシラバスを改善し、学生の皆さんが学習の流れを理解し、円滑に授業が受けることができるようにすることを目的として行うものです。

調査の趣旨を理解してもらい、アンケートへの協力をお願いします。

■ 学年を記入してください。 第()学年

■ あてはまるものを○で囲んだり、自分の考えを書いたりしてください。

1 【共通】シラバスを見ている。

よくあてはまる おおむねあてはまる あまりあてはまらない まったくあてはまらない

2 【1で「よくあてはまる」又は「おおむねあてはまる」と回答した人へ】

シラバスを見ている理由は次のうちのどれですか。(複数回答可)

- () 授業の目標が分かる。
- () 授業の内容が分かる。
- () 授業の進度が分かる。
- () テキストや持参物、課題が分かる。
- () 評価規準が分かる。
- () 評価方法が分かる。

その他に、シラバスを見ている理由があれば書いてください。

3 【1で「あまりあてはまらない」又は「まったくあてはまらない」と回答した人へ】

シラバスを見ていない理由は次のうちのどれですか。(複数回答可)

- () 授業の目標が分からない。
- () 授業の内容が分からない。
- () 授業の進度が分からない。
- () テキストや持参物、課題が分からない。
- () 評価規準が分からない。
- () 評価方法が分からない。

その他に、シラバスを見ていない理由があれば書いてください。

4 【共通】シラバスについて、このように改善してほしいということがあれば書いてください。

2.2 調査結果

(1) シラバスの閲覧状況

質問項目「シラバスを見ている」についての結果は表1のとおりであった。

表1 シラバスの閲覧状況

回答項目	回答数(人)
よくあてはまる	4(2%)
おおむねあてはまる	74(42%)
あまりあてはまらない	77(45%)
まったくあてはまらない	20(11%)

この結果から、「あてはまる」又は「おおむねあてはまる」と回答した学生は44%で、シラバスを閲覧していると判断できる学生は全体の半数にも満たないことが分かる。

(2) シラバスを閲覧している理由

質問項目1「シラバスを見ている」について「よくあてはまる」又は「おおむねあてはまる」と回答した学生に対する質問項目「シラバスを見ている理由は次のどれですか」の結果は表2のとおりであった。

表2 シラバスを閲覧している理由(複数回答)

回答項目	回答数(人)
授業の目標が分かる	33
授業の内容が分かる	45
授業の進度が分かる	23
テキストや持参物、課題が分かる	34
評価規準が分かる	51
評価方法が分かる	58

その他の理由

- ・ テスト勉強をする時のおおまかな振り返りとして見る。
- ・ 自分が履修しなくてはならない授業かどうか分かるから。
- ・ 自分がどんな授業を受けるのか気になるため、最初に1度は見る。
- ・ 試験の方法が分かる。
- ・ ノートにその回の授業の題(目標)等を記入するため。
- ・ 授業前にその日に学習する内容が分かるから。
- ・ 試験があるかどうか分かるから。
- ・ 先生にシラバスを見るように言われたから。
- ・ 見ている科目については、目的やねらいがはっきり示してあり、進度もシラバスに沿っているものです。

この結果から、評価規準・評価方法を把握するためにシラバスを見ている学生が最も多いことが分かる。次いで、授業内容を把握するためにシラバスを見ているが多いことが分かる。それらに比べて、課題等の授業外の学修を知り、それに取り組むためにシラバスを見ている学生は少ない。

(3) シラバスを閲覧していない理由

質問項目「シラバスを見ている」について「あまりあてはまらない」又は「まったくあてはまらない」と回答した学生に対する質問項目「シラバスを見ている理由はない理由は次のどれですか」の結果は表3のとおりであった。

表3 シラバスを閲覧していない理由（複数回答）

回答項目	回答数（人）
授業の目標が分からない	33
授業の内容が分からない	45
授業の進度が分からない	23
テキストや持参物、課題が分からない	34
評価規準が分からない	51
評価方法が分からない	58

その他の理由

- ・ パソコンから見るとはたいへん（操作、時間、インターネットの環境）だから。（23名）
- ・ シラバスを見る習慣がないから。（5名）
- ・ シラバスを見ようと思うが忘れてしまう。（4名）
- ・ 授業の1回目の前に見るだけで、いつも終わってしまいます。自分の中に見るという習慣がありません。もっとシラバスを見て復習してから授業に参加すべきだと思っています。
- ・ シラバスは見なくても大丈夫だから。（3名）
- ・ シラバスを見なくても何とかなってしまうので見ていない。（2名）
- ・ シラバスを見なくても授業を受ければ授業内容は理解できるから。
- ・ 最初だけ見ておけば、授業は進んでいくから。
- ・ シラバスを見る必要がないと思っているから。（3名）
- ・ シラバスを見てもあまり変化（効果）がないから。
- ・ シラバスを見ても授業内容を変える先生もいるので、あまり役に立たないから。シラバスに沿って授業をしてくださる先生のは見ます。
- ・ シラバスを見ていない教科はねらいからずれていたり、内容もシラバスどおりでないため見ようと思わない。
- ・ 履修科目を決める時に見るくらいで、先生によってはシラバスどおりにやっていない先生もいるから。
- ・ 内容が分からないから。（2名）
- ・ 字数が多く全科目に目を通すのはとてつもない労働に感じる。
- ・ 長文で言葉が難しいから見ても分からない。
- ・ どこを見たらよいかがよく分からないから。（3名）
- ・ 興味が湧かない。

この結果から、授業の内容、授業の進度、評価規準が分からない学生が多いことが分かる。具体的には、字数の多さ、言葉の難しさを挙げている。

その他には、シラバスは Web 上で閲覧するようになってきているため、そのための操作の煩わしさや時間がかかることを挙げている。

また、次のような教員の指導上の問題点も挙げている。

- ① 授業を受けるにあたって、シラバスを見なくても困らない。
- ② シラバスと授業の内容が一致していない。
- ③ シラバスの内容を理解するための知識がない。等
- (4) シラバスについて改善してほしいこと

質問項目「シラバスについて、このように改善してほしいということがあれば書いてください。」

については、次のような記述が見られた。

- ・ 分かりやすさ、見やすさを重視してもらいたい。(2名)
- ・ 端的にまとめてもらいたい。(2名)
- ・ 分からない言葉が使われていたので分かりやすくしてもらいたい。(2名)
- ・ 曖昧な書き方がしてあったので、はっきりと書いてもらいたい。(2名)
- ・ 授業内容や資格について、もう少し詳しく示してほしい。(3名)
- ・ 課題(提出物)やその提出期限を書いていないものがあったので書いてもらいたい。
- ・ 試験の形態を書いておいてもらいたい。
- ・ テキストを購入しなくてはならないのかどうかを書いてほしい。(2名)
- ・ 試験が行われる日付が分かりにくい科目があったので改善してほしい。
- ・ シラバスのとおり授業を行ってほしい。(3名)
- ・ シラバスを見たほうがよいのならば、そのことを伝えてほしい。
- ・ 印刷物で配付してもらいたい。(13名)

この結果から、シラバスの記述内容、記述方法について改善を求めるものが最も多かった。その他には、教員の授業、シラバスの配付方法について改善を求めるものがあった。

2.3 考察

調査結果から、本学の学生がシラバスを閲覧していない状況があることが分かった。

その要因としては、Web上で閲覧するという閲覧方法の課題もあるが、それ以上に大きな課題は、シラバスの記述内容・記述方法にあると言える。さらには、シラバスを閲覧しなくても特段の支障が生じないという教員の授業に課題があると言える。

本学では、FD活動の一環として全ての科目でシラバスを作成し、公開してきた。このことは一定の成果と言えるが、FD活動を一層推進していくためにはシラバスの改善を図っていくことが必要であることが分かった。

3 シラバスの記述

3.1 シラバスとは

中央審議会答申(2008)では、シラバスについて次のように解説している。

各授業科目の詳細な計画。一般に、大学の授業名、担当教員名、講義目的、各回ごとの授業内容、成績評価方法・基準、準備学習等についての具体的な指示、教科書・参考文献、履修条件等が記されており、学生が各授業科目の準備学習等を進めるための基本となるもの。

ここで「詳細な計画」とあるのは、シラバスが授業内容の概要を総攬する資料(コース・カタログ)とは異なることを意味していると考えられる。また、「学生が各授業科目の準備学習等を進めるための基本となるもの」とあるのは、シラバスが単位制度の実質化を図るための資料であることを意味していると考えられる。

学修とは、大学設置基準第21条にも規程されているとおり授業と授業時間外の学修を合わせたものである。したがって、シラバスは15回の授業内容を伝えるだけでなく、土持(2011)が述べている

ように「自学自修を奨励するため、さらに、学習の自発性を振起させるため」の資料となるよう改善を図っていく必要がある。

3.2 記述の分析

3.2.1 分析の対象

シラバスに記述すべき項目としては、中央審議会答申（2008）の解説によると、「大学の授業名」「担当教員名」「講義目的」「各回ごとの授業内容」「成績評価方法・基準」「準備学習等についての具体的な指示」「教科書・参考文献」「履修条件」が考えられる。また、同答申では、大学に期待する取組として、次の3点を挙げている。

- 各科目の到達目標や学生の学修内容を明確に記述すること。
- 準備学習の内容を具体的に指示すること。
- 成績評価の方法・基準を明示すること。

これらのことを踏まえ、本稿では次の項目の記述について分析を行うこととする。

- (1) 到達目標
- (2) 学修内容（本学の場合「授業計画」）
- (3) 準備学習の内容（本学の場合「授業外学習の指示等」）
- (4) 成績評価の方法（本学の場合「成績評価方法」）
- (5) 成績評価の基準（本学の場合「成績評価基準」）

これらの項目は、1の調査において、学生が「分からない」「改善してほしい」項目として挙げられていたものと重なることから、今後シラバスの改善を図っていく際の示唆が得られる項目であると考ええる。

なお、分析の対象とする科目は教育職員免許法施行規則にその内容が規定されており、記述にばらつきが少ないと考えられる国語科教育法、社会科教育法、算数科教育法、理科教育法、生活科教育法、音楽科教育法、図画工作科教育法、家庭科教育法、体育科教育法の9科目とした。

3.2.2 「到達目標」の記述の分析

(1) 分析の視点

教育課程及び指導法に関する科目は、教育職員免許法施行規則において「学習指導要領に掲げる事項に即し、包括的な内容を含むものでなければならない」と規定されている。

分析に当たっては、学習指導要領の内容の構成に基づいて、到達目標に「教科の目標」、「各学年の目標及び内容」、「指導計画の作成と内容の取扱い」に関して記述されているかどうかについて分析することにした。

なお、「指導計画の作成と内容の取扱い」について、学習指導案の作成も指導計画の作成の中に含まれるものとした。

(2) 分析結果

表4 到達目標の記述

項目	記述されている	記述されていない
教科の目標に関する到達目標	4	5
各学年の内容に関する到達目標	6	3
指導計画の作成と内容の取扱いに関する到達目標	4	5

(注) 数字は科目数

到達目標についての記述の分析は表4のとおりであった。

表4から、到達目標についての記述は各科目によってばらつきが見られることが分かった。3つの項目を全て記述していたのは2科目、3つの項目を1つも記述していなかった科目は1科目であった。

また、3.2.1でも述べたとおり、到達目標については明確な記述が求められている。したがって、記述に当たっては「説明できる」「書くことができる」のように学修を通して、どのような行動の変化が見られるかを記述する必要があると考えるが、到達目標が全て外的な行動として評価することができる記述となっていたのは1科目のみであった。

(3) 考察

それぞれの授業は大学の教育理念、各学科の人材育成目標の達成に向けて開講されているものであり、教員は自らが担当する授業が大学又は学科の中で担っている役割を踏まえて到達目標を設定する必要がある。また、到達目標は授業計画、成績評価基準・方法等の拠り所になることから、極めて重要な意味を持つ。

したがって、到達目標の設定に当たっては、学科又は関係科目を担当する教員が連携を図っていく必要があると考える。特に、本稿で分析の対象とした教科教育法のように法令によって授業内容が規定されている科目の場合には、教員がそれぞれ目標を設定するのではなく、各科目の共通の目標を設定する等、組織的として設定していく必要があると考える。

また、記述に当たっては、分析の対象としたシラバスに「…を理解している。」という記述が見られた。学生が理解しているかどうかを評価するためには、「説明できる」「例を挙げることができる」といった理解している状態を外的な行動で記述する、すなわち行動目標で記述する必要があると考える。

このことを学内で改善していくためには、FDを推進する部署が学習の成果が現れた状態を表す動詞、例えば「説明する」「例を挙げる」「書く」「収集できる」等の動詞を例示していくことも一つの方法であると考えられる。

3.2.3 「授業計画」の記述の分析

(1) 分析の視点

学習指導要領の内容の構成に基づいて到達目標を設定すると、その目標を達成するための授業が計画されなくてはならない。

そこで、授業計画の分析に当たっては、到達目標と同様に「教科の目標」、「各学年の目標及び内容」、「指導計画の作成と内容の取扱い」に関して記述されているかどうかについて分析することにした。

なお、学習指導案の作成は、到達目標の分析と同様に指導計画の作成の中に含まれるものとした。

(2) 分析結果

授業計画についての記述の分析は表5のとおりであった。

表5 授業計画の記述

項 目	記述されている	記述されていない
教科の目標に関する授業の計画	6	3
各学年の内容に関する授業の計画	8	1
指導計画の作成と内容の取扱いに関する授業の計画	8	1

(注) 数字は科目数

表5から、授業計画についての記述は各科目によってばらつきが見られることが分かった。3つの項目を全て記述していたのは5科目、3つの項目を1つも記述していなかった科目はなかった。ただし、1科目はテーマのみで内容が記述されていなかった。

また、表4と表5を比較すると、例えば各学年の内容に関する授業を計画している科目が8科目であるのに対し、各学年の内容に関する到達目標を設定している科目が6科目となっている。このように到達目標と授業計画に不整合が見られる科目があった。

次に、3つの項目についてそれぞれどのくらいの時間（授業の回数）を計画しているかを分析したのが表6である。

表6 授業時間（回数）

項目	平均	最少	最多
教科の目標に関する授業の計画	0.4	0	1.0
各学年の内容に関する授業の計画	1.0	0	4.5
指導計画の作成と内容の取扱いに関する授業の計画	2.6	0	11

（注）数字は科目数

表6から、教科の目標に関する授業の回数に大きな差は見られない。それに比べると、各学年の内容に関する授業と指導計画の作成と内容の取扱いに関する授業の回数は差が大きいと言える。特に、指導計画の作成と内容の取扱いに関する授業で最多11回の科目は11回を学習指導案の作成に当てていた。

(3) 考察

分析の対象としたシラバスでは、教科の目標をすることを到達目標として設定しているにもかかわらず、授業計画に教科の目標を取り扱う授業が計画されていない科目や、オリエンテーションの中で他の授業内容とともに取り扱い、教科の目標に関する時間が十分に確保されていないのではないかとと思われる科目が見られた。

記述に当たっては、本学のフォーマットは授業計画、到達目標の順になっているが、到達目標、授業計画の順に記述していき、各科目の到達目標と授業計画の整合を図る必要がある。また、各科目の授業を担当する教員が連携を図り、バランスのとれた授業計画にしていく必要がある。さらに、分析の対象としたシラバスでは「VTRの視聴」のみしか記述されていない科目も見られた。こうした記述では活動はあるが学びがないと判断されかねない。VTRの視聴を通して何を考え、何を身に付けさせようとしているのかを具体的に記述する必要があると考える。

3.2.4 「授業外学習の準備等」の記述の分析

(1) 分析の視点

授業外学習の準備等については、先にも述べたように中央教育審議会答申（2008）において、明示することが期待される項目である。

ここでは、全ての記述を抜き出し、具体的に記述されているかどうかを検討する。

(2) 分析結果

授業外で学生が「何を」「どのように」学修したらよいかがある程度分かると思われる記述と、分かりにくいと思われる記述に分類してみる。

表7 「授業外学習の準備等」の記述

【分かる記述】

- ・ シラバスを熟読する。
- ・ 試験に向けて全体の復習（準備）をする。
- ・ 学習指導案について目標（展開）を書く。
- ・ 学習指導案を作成する。
- ・ 第〇回に配付したプリントに沿って予習する。
- ・ 資料を基に復習する。

- ・ 協議、検討をもとに学習指導案を修正、改善する。
- ・ ○年教科書教材を事前に歌ったり、リコーダーを練習したりしておく。
- ・ テキスト該当ページを熟読する。
- ・ 配付したプリント課題に取り組む。
- ・ 模擬授業の中のよい点、悪い点を整理する。
- ・ 具体的な事例を挙げて評価してみる。

【分かりにくい記述】

- ・ 小学校学習指導要領解説○○編の内容等を復習する。(範囲・程度が分かりにくい)
- ・ 配付資料の内容等を復習する。(範囲・程度が分かりにくい)
- ・ 学習指導案を収集する。(方法が分かりにくい)
- ・ 学習指導案について教材研究をする。(方法、範囲・程度が分かりにくい)
- ・ 学習指導案について構想する。(「構想」という表現から具体的な行動がイメージできにくい。)
- ・ 学習指導案等参考資料を収集する。(範囲・程度、方法が分かりにくい)
- ・ 分担して活動を進める。(記述から具体的な行動がイメージできにくい。)
- ・ リコーダーを練習してくる。(範囲・程度が分かりにくい)
- ・ 学習指導案単元を事前に把握しておく。(記述から具体的な行動がイメージできにくい。)
- ・ 参観授業の事前学習をする。(方法、程度が分かりにくい)
- ・ ○○科の授業についてイメージを膨らませる。(記述から具体的な行動がイメージできにくい。)
- ・ 文科省並びに民間教育研究団体について理解を深める。(記述から具体的な行動がイメージできにくい。)
- ・ ○○科教材の分析を行う。(方法、範囲・程度が分かりにくい)
- ・ 具体的な場面を想定して指導方法を展開してみる。(記述から具体的な行動がイメージできにくい。)
- ・ 教育実習に向けて準備する。(方法、範囲・程度が分かりにくい)

これらを見ると、次のようなことが分かる。

- 全ての科目で「授業外学習の指示等」が記述されていた。
- 授業後の復習への指示がほとんどで、授業前の予習への指示が少ない。
- 「教育実習に向けて準備する」のように授業外学修が授業に反映されない指示が記述されていた。
- 「小学校学習指導要領解説○○編の内容等を復習する」のように学習の範囲や程度が分かりにくい指示、「学習指導案等参考資料を収集する」のように方法が分かりにくい指示、「学習指導案について構想する」のように行動がイメージできにくい指示が多く見られた。

(3) 考察

中央教育審議会が求めている単位制度の実質化を図るためには、授業の改善を図るだけでなく、授業外学修の一層の充実を図っていかなくてはならない。こうした意味から、「授業外学習の指示等」の記述は極めて重要な意味を持つものである。

分析の対象としたシラバスでは「授業外学習の指示等」のほとんどが授業の復習に関するものであった。今後は授業の予習、すなわち事前学修に重点を置き、学生自らが事前学修を進めることができるような指示等を記述する必要があると考える。

記述に当たっては、学生に期待する学修を具体的な行動で記述するとともに、必要に応じて学修方法、範囲・程度、指定図書・参考図書を記述する必要があると考える。また、指定図書・参考図書については、それらがどこに置かれているかも記述することが望ましいと考える。

3.2.5 「成績評価方法」の記述の分析

(1) 分析の視点

成績評価方法についても、先にも述べたように中央教育審議会答申(2008)において、具体的に記述することが期待される項目である。

ここでは、全ての記述を抜き出し、明確に記述されているかどうかを検討する。

(2) 分析結果

表8から次のことが分かる。

表8 成績評価方法とその割合

	授業への参加の 度合い	レポート・学習指導 案の作成等の課題	試験	ノート (予習を含む)
科目1	30	20	50	
科目2	40	30	30	
科目3	30		40	30
科目4	20	30	50	
科目5	40	教員によるグループ発表の評価 (40) グループ内の学生自身の評価 (20)		
科目6	期末テスト及び授業での提出物や小テスト, 授業態度など			
科目7	30	30	40	
科目8	40	提出物 (学習指導案, 参考作品, 小レポート)		
科目9	20	30	教員によるグループ発表の評価 (20) グループ発表の評価 (30)	

(注) カッコ内の数字は%

- 全ての科目で評価方法が記述されていた。
- 科目5, 科目6のように, 割合が記述されていない科目があった。
- 授業前の学修を評価する科目は1科目であった。
- 到達目標を「学習指導案を書くことができる」と設定しているが, その評価方法に学習指導案の作成が記述されていない等, 到達目標と評価方法が整合していない科目があった。

(3) 考察

おおむね統一がとれた記述がなされていたが, 到達目標の達成状況を評価するための方法として不適切ではないかと思われる科目もあり, 到達目標と成績評価方法の整合を図る必要がある。

また, 3.3.3で述べた授業外学修の充実を図るためには, それを評価の対象としていくことも必要であると考ええる。

さらに, 一つ一つの評価方法, 例えば「授業への参加の度合い」の場合, 学生に期待する授業への参加の態度を具体的に示す必要があると考える。このことをシラバスに記述するか否かは検討の余地があるが, 少なくとも授業の中で教員から受講する学生に説明をする必要があると考える。

3.2.6 「成績評価基準」の記述の分析

(1) 分析の視点

成績評価基準についても, 成績評価方法と同様に中央教育審議会答申(2008)において, 具体的に記述することが期待される項目である。

ここでは, 全ての記述を抜き出し, 明確に記述されているかどうかを検討する。

(2) 分析結果

表9から次のことが分かる。

成績評価基準については記述例が示されていることもあり, 記述に大きな差は見られなかった。しかし, 前述のアンケート結果から記述が曖昧であるという学生の声があり, 今後検討すべきであると考ええる。

(3) 考察

成績評価基準は, おおむね統一がとれた記述がなされていたが, 1のシラバスに関するアンケートにおいて, 学生の中には曖昧であると捉えている学生もいることから, 「一定水準以上」「非常に高い」「極めて高い」等の記述ではなく, 本学の授業科目履修規程に則って「S 90~100点」「A 80~89点」

表9 成績評価基準

成績評価基準の記述	科目数
到達目標①～③について、一定水準以上であると確認できる場合：S 到達目標①～③について、一定水準であると確認できる場合：A 到達目標①②を中心に、一定水準であると確認できる場合：B 到達目標①～③について望ましい水準ではないが、評価できると確認できる場合：C 出席や提出物が不十分かつ到達目標に達していないと確認でき、評価できる条件を満たしていないと判断される場合：D	6
到達目標①～④について、極めて高い水準にある場合：S 到達目標①～④について、十分に満足できる場合：A 到達目標①～④について、おおむね満足できる場合：B 到達目標①～④について、いずれかに努力を要する場合：C 到達目標①～④について、いずれも努力を要する場合：D	3

「B 70～79点」「C 60～69点」「D 60点未満」と記述する方が望ましいと考える。

4 終わりに

本稿では、シラバスの利用状況並びにシラバスの記述に焦点を当てて調査・分析を行ってきた。実際の授業においては、シラバスに記述されていない内容についても取り扱われていることは十分に予想される。しかし、学生はシラバスを閲覧して受講科目を決定することを考えたならば、シラバスは教員と学生との「契約書」である。学生主体の教育改革を進めていくためには、シラバスを分かりやすく、学修の充実の視点から見直しを図っていくことが必要であると考ええる。

また、Web上でシラバスを公開している本学の場合、シラバスは社会一般への教育課程の「説明書」である。その意味では、統一性、整合性の視点から見直しを図っていくことが必要であると考ええる。

さらに、学生の約半数しかシラバスを閲覧していない状況を考えると、現在本学のFD活動の一つとして行われている授業評価の質問項目「この授業を受けて、シラバスに到達目標として掲げられている知識や能力を獲得できましたか。」については信頼性のおける評価が行われているとは言い難く、今後見直しを図っていくことが必要であると考ええる。

同審議会は「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」の中で学士課程教育の質的転換を図るために、学修時間の増加・確保を求めている。また、そのための方策の一つとして、授業計画(シラバス)の充実を求めている。本稿で明らかになったシラバスの記述に関する課題は単なる記述の問題ではなく、教員の授業力の問題であると考ええる。教育の質を保証に資するシラバスを作成していくためには、授業全体を見直し、授業を設計する力を高めていくことが必要であろう。

【引用・文献参考】

- ・中央教育審議会(2005),「我が国の高等教育の将来像(答申)」
- ・中央教育審議会(2008),「学士課程教育の構築に向けて(答申)」
- ・中央教育審議会(2012),「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」
- ・土持ゲーリー法一(2007),「ティーチング・ポートフォリオ 授業改善の秘密」,東信堂, p. 36.
- ・土持ゲーリー法一(2011),「ポートフォリオが日本の大学を変える ティーチング/ラーニング/アカデミック・ポートフォリオの活用」,東信堂, p. 199.